

日本人のみた外国 市井の「営み」 -- ハノイ市（カルチャー・ショック）

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	122
ページ	45-45
発行年	2005-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005602

市井の「営み」——ハノイ市——

寺本 実

ベトナムでは現在「工業化・近代化」路線が推進されている。筆者は首都ハノイ市に一九九九年三月末から二〇〇一年四月初めまで滞在した。垣間見た街の人たちの「営みの変化」を少し紹介したい。

①路上茶屋

街では、歩道上に木やプラスチック製の机、椅子をしつらえて、小さな湯飲みにエスプレッソのような強めのお茶を注いで販売する茶屋がよく見られる。ある茶屋は当初お茶と駄菓子だけを売っていたが、ある日、ミエンという春雨状の麺、鶏のスープの「汁そば」を売り始めた。集客を見込み、机と椅子も増やされた。

また、排気ガスや埃が舞う中でお湯を沸かしていたが、しばらくすると薬缶の周囲

に円筒形の鉄板カバーを巻いた。埃などが入らぬよう工夫したという。

②コピー屋

街には、書類、本などのコピーをとることで生活の生業を立てるコピー屋が多くある。夫婦で経営する畳一畳分ぐらいの店があった。初めは一台コピー機があるだけだったが、中古コピー機が新たに導入された。

③万屋

お菓子から始まり、パン、ジュース、酒類、ノート、ボールペンから下着、雨合羽など、様々な商品を売る昔ながらの万屋。ある万屋は近くのスーパーに圧されたのか店を閉めた。なにかあったのかと心配していると、建設業者が店を壊し始めた。店の

奥さんにはばったり会って尋ねてみると、四階建ての家を建て、それを人に貸して生活することにしたという。万屋から不動産業への転身である。

④カフェ（喫茶店）
コーヒー、紅茶

パバイヤ・マンゴー・パイナップル・スイカの生ジュース、ケーキ類、果物などを販売するカフェ。あるカフェは店を突然閉め、改装工事を始めた。リニューアルと想っていたら携帯電話会社の販売店舗になった。

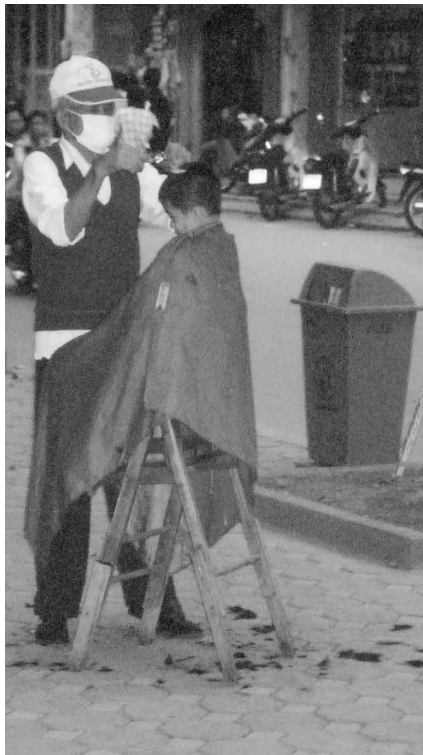
⑤ビンザン

ビンザンは、安価な料理を庶民に提供してきた、日本でいえば大衆食堂である。時に通ったそのビンザンは女主人が経営していたが、ある日突然店を閉めた。しばらくすると、店舗はコンピュータ会社になった。主人はその建物脇にビニール製の屋根を張り、机、椅子を並べて茶屋を始めた。

● ● ●
最初の二つの例は、商品を増やし、衛生にも気を配り、新たな設備投資を行っている。残り二つの例では、従来通りの「営み」を維持、継続することは困難と判断し、店を閉めて転身を図っている。

国有企業と異なり、国家の保護を多く期待できない街の人たちは、変化が多く厳しい経済社会状況に早くから直接さらされてきた。日々の生活の中でそれぞれが活路を求めているといえそうだ。

（てらもと み のる／アジア経済研究所
地域研究センター）



ハノイ市で見かけた路上の床屋さん（筆者撮影）